
たった一つの異譚 ～Crossing～

リトルとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一つの異譚

（Crossing）

【Nコード】

N2979N

【作者名】

リトルとり

【あらすじ】

再会した日に異世界へ飛ばされた兄・涼一と弟・真也。
誰が何の為に二人を異世界へ誘ったのか？

別々の地に降り立った二人は互いの道を歩むことを余儀なくされた。
二人と取り巻く仲間達の思いは交錯し、鮮やかな模様を彩る、そんな一つの物語

※題名や粗筋は仮のものだとご了承下さい。ジャストフィットするものが浮かび次第更新いたします。

※
8
／
2
7
第一話
加筆
修正

真也編 プロローグ（前書き）

この物語は筆者の処女作です。

もしも頂けるのであれば、

厳しいご意見ほど歓迎致します。

不定期更新ですが完結目指していきます。

宜しく願います。

※手直し等無断で行う場合があります。ご了承下さい。

勿論、物語に重大な影響を与える改変の場合は、前書きに明記致します。

真也編 プロローグ

古ぼけたペンチに少年が座っていた。

明かりが遠い所為で背景に溶け込んでしまったかにみえる。

彼は組んでいた指をゆっくりほどくと、ふと空を見上げた。

ちよつと一寸前迄まだ見えなかったベガが目飛び込んでくる。

ひときわ一際耀く星を暫く眺めるとふうと息を洩らし、俯きまた指を組み直した。

遠くから丸い光が射し込み、釣られて遮断機が乾いた音を鳴らした。

光は膨らみながら、焦らすかのようにゆらゆらと近づき、
きし軋みながら彼を僅かに追い越して止まった。

二両編成の先頭の扉から青年がゆっくりと現れると、急くかのように光は遠ざかり、再び闇が訪れた。

「涼兄、お帰りなさい」少年はペンチから離れ青年に向かって歩いていく。

「ただいま。わざわざ学校帰りに迎えに来なくて良かったんだぞ」
涼兄と呼ばれた青年は答えた。もしも昼間なら、優しい微笑みが見えただろう。

「母さんが、『お兄ちゃんはお東京から帰ってくるんだし、半年ぶりだから荷物持ってあげなさい』って五月蠅いんだよ」

五回も同じことを言われたら、うんざりするの当然かも知れない。
青年が右手に持っていたポストンバックをさっと奪うと少年は並んで歩き出した。

「元氣だったか？ 真也」

うん―少しだけ間を空け、

「でも涼兄帰ってきたら賑やかにやるね」

夜が幸いしたであろう。

少年、眞也の表情を闇が隠した。

「会いたかったよ。久しぶりに」

青年は肩に背負った細長いバッグを握り直した。

辺りには梟と蛙の協奏曲が木霊していた。

若干十九歳で既に古武道の師範格で将来を担う若手と称され、両立しながら最高学府と呼ばれる大学に入学、おまけに名前の如く切れ長な涼しい目の美青年という涼一。

そんな兄の後に生まれてきたばかりに、理想と比べられ減点法で評価される責務を嫌が応にも負わされた眞也。

彼は決して愚鈍ではなかった。

容姿、勉強、運動神経、その他殆んど有能力で中の上から上の下といった位置には到達出来てはいた。

だが、

だが――

それでは周りから認めて貰えない。やんわりと巧妙に否定されるという現実を常に突き付けられた。

期末試験で必死に勉強し学年三番に入った時の両親のあまりに薄い反応は辛かったであろう。その記憶は度々、彼を襲った。

クラスの女子は決まって兄のことを聞きたがった。うんざりして異性から自然に避けるようになった。

何時しか興味を覚えた書籍、特に歴史小説が提示する雄大な世界観に惹かれ、図書館に入り浸るようになった。

換わりに兄に倣うかのように通った道場からは遠退いた。

両親からも、武道師範からも強い引き留めはなかった。

たった一人、兄を除いては。

五ヶ月前、涼一と離れて暮らすようになってから、劣等感からの解放という平穏と果てしなく巨大な壁が姿を消した寂寥が押し寄せた。等価な感情なんて存在するのだろうか。

軽い無気力状態に陥った彼はリハビリを終え、人並みな恋もする多感な高校二年生として日常を送るようになった。

東京の話、最近の夫婦喧嘩のきっかけ、真也の身長が伸びたこと、など取り留めのない話をする内に、二人は並んで歩くには狭い小路に差し掛かった。

真也は後ろから付いて行く。

路の両側には樹木が犇めき、夏とは思えないほどひんやりした風が二人を出迎えた。

兄の背中を追っていた頃の記憶が嫌でも思い出され、真也は口をつむんだ。

ひよっとしたら涼一も同じ思いが頭を過ったかもしれない。

沈黙が二人を支配した。

いつの間にかBGMも止んでおり、耳に痛いほどの静寂が二人を包む。

思いに耽^{ふけ}っていた真也がふと我に帰ると、足元を純白の霧が流れていた。

はっと顔を上げると、今まで在った兄の背が見えず、足元だけだと思つた霧が辺り一面を覆っていることに驚愕し、思わず声を絞り上げて叫んだ。

「涼兄！ どこにいるの？ 涼兄！」

霧は包帯のように彼を巻き、優しく隠そうとするかのようだった。彼は冷や汗が頬を伝うのを感じた。

「大丈夫か眞也？ 何処だ？」

予想以上に小さな小さな声が返ってきた。

――しかし、

もはや眞也はその呼び掛けに応えることは出来なかった。

身体は重く、意識は遠くなり、

ゆっくりと倒れた。

彼は更に奥底に誘おうとする地の意外な柔らかさと暖かさにかすかに驚き、

そして意識を閉じた。

天にはベガが目映く輝いていた。

真也編 プロローグ（後書き）

この話は最強モノでもハーレムモノでもありません
需要少ないでしょうが

（ノ―>。）

第一章 「Boy Meets」

軽く叩かれる感触に眞也は意識を取り戻した。

ひんやりした滑らかな手が、左頬に当たっているようだ。

それは少し締めまりが悪くなった蛇口から漏れる水滴のように、ゆったりと一定のリズムを刻む。

眞也にはその感触が心地良く、このままでもいいと感じさえしたが、十回過ぎた頃、ようやく目を開いた。

「あらあら、やっと起きたようね」

あお向けのまま声に顔を向けた。

左手を膝に掛け僅かに屈んだ女性の、眞也に触れていた右手をゆっくりと戻そうとする姿が見える。

太陽の光を思う存分浴びて輝き、肩まで届かない短さとは思えない存在感を放つ亜麻色の髪。

視る者を捉えて離そうとしない琥珀色の凛々しい瞳。

彼女は夢の続きと思わせるほど幻想的な美しさに満ちていた。

どれくらい互いを見ていたのだろうか、たった数秒に過ぎないかもしれないが、彼女の瞳は彼の心に焼き付き、残った。

眞也はようやく話しかけられていたことを思い出し、慌てて上半身を起こし、返事をしようとした。

すると、

「地元の方から不審な男が倒れているとの通報があつてな」

眞也が口を開く前に、反対側から声を掛けられた。

悪く言えば馴れ馴れしい、良く言えば親しみのある、そんなテノールの声。

（カップルかよ……）

残念な気持ちを押し殺しつつ、そちらを振り向いてぎょつとした。

男には――、

翼が生えていた。

目覚めたてで頭にこべりついていた膜を、布団のようにひっぺがされた、そんな感覚。

（お、お前のほうが不審だろっ！）

と思いはしたのだが、

口はまったく動いてくれなかった。

黒を基調として白いストライプが二本横に入っている大きな翼は風に靡^{なび}き、今にも飛び立ってしまいなほどの躍動感を放っていた。

よくよく見ると、男には尖った黄色の嘴も生えていた。

とってもいい顔をしていたのだろうか。

固まった眞也を、

「ひょっとして貴方、亜人見たことなかった？」

女は朗らかに声をあげて笑う。

眞也は亜人の意味がよく解らなかったが、
翼を生やした方とお知り合いになるのは初めてに違いなかったので、
勢い良く首を縦に振る。

一回だけでは絶対足りない気がしてもう二回繰り返してみた。

男は驚かれるのが心外だったのか、

「『ジャン様の羽に包まれない』と麗しき乙女達からは絶大な支持を受けてるんだぜ」

翼を前で交差させ、誰かを抱くかのような仕草を得意げにする。

「へー、初耳。私もされた事ないし。ま、その前にぶっ飛ばすけどね」

「おいおいフィオナ、聞こえなかったのか？」

俺は麗しき乙女と言ったんだぜ」

「ちょっと、それいったいどういう意味よ？」

「いや別に。そうかそうか、ずっと懂れてたんだな。」

仕方ないから断腸の思いでサービスしてやらんでもないぜ」

「近寄るな、ヘンタイ！」

ジャンと名乗った男とフィオナと呼ばれた女は、
不審な男・眞也を置いてきぼりにして口論している。

放置された彼はとりあえず立ち上がり、

エキサイトしてぷるぷると尻尾を震わせるフィオナを見ていた。

（えっ！ 尻尾？ しっぽ？）

フィオナはゆったりとしたオレンジ色のワンピースを身に纏っていたが、

後ろの腰あたりから緋色ではあるが、爬虫類のそれを思わせる尻尾

をウェーブさせていた。

彼女は真也の熱い眼差しに気付き、

「ああ、ごめんごめん。もうコイツほんとバカなんだから。私は蜥蜴族、サラマンダーのフィオナ・ローレン、宜しくね」

言い訳になっているか際どい一言を添えて自己紹介すると、ジャンが間髪入れずに続く。

「俺はジャン・グリエールだ。鳥族のヴェズルフエニフル。気軽にジャンと呼んでくれ。まあジャン様でも構わないぜ。で、あんたは？」

初めて見る異人種達で混乱していたが、落ち着こうとごくんと唾を飲み込み、なんとか声を紡ぎだした。

「僕は最上真也。人間……でいいのかな？
家に帰る途中、突然気を失って、起きたら何故か……ここで不審者になってます」

真也はようやく異なる世界での第一歩を切ったのだった。

「ふうん、ニホンねえ。初めて聞いたぜ」

二人から聞いたことから、
ここはリュクロン大陸・旧レインホールド王国のノクトレーン伯領であり、

目の前の二人はノクトレーン伯に仕えている騎士であることが取り
敢えず解った。

（大陸とか国もまったく聞いたことないし、

単純に過去とか未来に来たんじゃなくて別次元の世界とか、別の星に来てしまったということか？

でもなんで言葉通じるんだろう？

わけわかんね)

不思議に思ったが、通じないよりは通じた方がマシだし、

異なる世界のこととかお家への帰り方とか諸々に比べたら些細な事に思えたので、

深く考えないことにした。

まだまだ全然質問し足りない真也であったが、

「とりあえずさ、真也の格好とっても怪しいし、後のことはお城でゆっくり話そうよ」

とフィオナが提案した。

ここまで学ラン全否定されるこの世界の文化カルチャーが解らない真也であったが、

これまでの二人の様子と肩書き(笑)から、

たぶんこの人達は付いていっても大丈夫な人達だと判断して頷いた。

「じゃあ……」

「あ、フィオナさん。

あと、もう一つだけ教えてください。

ひょっとしたら兄も一緒にこの世界にやって来たかも知れないんですが、

僕他に誰も見ませんでしたか？」

真也はとても重要なことを思い出し、フィオナを遮った。

ジャンは近くの木に止まっていた小鳥と、真也には理解不能な言葉でやりとりした。

「『あんさんのほかだーれも見えてへんでえ』だとさ」

眞也は、ジャンと地元の方に礼を言った。

（涼兄はこの世界の別の所に飛ばされたか、僕みたいに巻き込まれずに家にいるかだけど、あの兄貴は間抜けじゃないから元の世界に
いそうだ。それですごく心配してるんだろうな……）

眞也がそう思いを巡らせていると、

「ジャン。ちよっとお城まで距離あるんだから、あんたこの子の
けてってあげなよ」

「な、俺は十四歳未満のぷりていな女の子しか乗せない主義だし」

「あれー。そんなこと言っているのいいのかなー？」

昨日酔っ払って、下半身隠した翼を通行人の前で突然ぱっーて広
げたこと〇〇ちゃんにいいつけちゃおっかなー」

「ちょ、それとこれとは話が全然べ……」

「〇〇ちゃん泣いちゃうだろうなー。かわいそう」

「……誠心誠意御案内させて頂きます」

二人は何やら話しがまとまったらしいが、

僕はご遠慮させて頂きたいと眞也は思った。

「私のこともフィオナって呼んでいいから」

そう笑って、彼女は白馬に跨がり、一足早く城に戻っていった。

第二章 「Sky High」

「うわぁ、すっげー！」

生まれて初めて空を翔んだ眞也は、心までも舞い上がっていた。

終わりが無い見渡す限りの大パノラマ。

見下ろすと視界の大半を占める緑はあまりに鮮やかで、木々の息吹が感じられるようだ。

風はどこまでも清々しく、浴びせたものを爽やかな気持ちで満たす。元の世界の風と同じものとは到底思えないほど、意思が感じられる。

時折、雄大な鷺わしとすれ違い、駒鳥の群と交わる。

躍動した生命いのちは、地から見る彼等の姿は仮初かりそめに過ぎないと物語っていた。

ジャンの温かい背中の上で眞也はただただ感動していた。

翼を初めて見た時の驚愕は、羨望へと変貌していった。

ジャンはのんびり空を翔ぶ。

（ジャンは会ったばかりの僕に、この景色を存分に楽しませてくれるのかな？

だからフィオナもジャンに僕を乗せるようにしてくれたかも。

二人とも見た目ちょっと普通とは言い難いけど、優しいんだな）

眞也は自分の住む世界とは違う世界を、

出会ったばかりの二人を、

もっともっと知りたいと思った。

真也の嬉々とした思いが伝わったのだろうか。

「ちよっと遠回りしようか」
おもむろ

と徐に、今まで左側に見えていた太陽の方に向かった。

やがて、緑を分断する青いラインが現れた。

近づくにつれ、水鳥が増えていく。

「クラリス河と言ってな。

旧レインホールド王国とアルステイン公国の境界になってるんだ」

そう言うとき、ジャンはゆっくりと下降を始め、

大木と同じ位の高さ迄、近づいた。

クラリス河は、少なくとも幅五十メートルはありそうな大河であった。

水は透き通り、穏やかな流れはさらさらと静かに奏でる。

流れに沿って泳ぐ無数の魚の影も見取れた。

自然が在るがままに残っている、そう感じさせた。

そのまま河の流れに逆流していると、

右手―旧レインホールド王国側で煙が上がっていることに真也は気付いた。

今まで空から楽しんだ風景とは決して相容れてはならないような、灰色の柱。

「ジャン、あの煙は何？」

ジャンは何か心当たりが有ったのだろうか、急に顔を陰しくさせる。

「しっかり掴まってろよ」

とだけ言い、突き刺す風で痛みを感じるほど加速して、柱に向かった。

その頃、村では、鎧兜を纏った十人ほどの屈強な男達が暴虐の限りを尽くしていた。

家は焼かれ、僅かな家財は全て略奪された。

村人達は殆んどのが捕まり、錆びて赤黒くなった鉄格子の檻に囚われた。

「へっへっへ。あらかた奪っちまったな。あとは孤児院だけだぜ」

「子供は高く売れるからな。絶対殺すなよ」

「しかし、しけた村だ。若い女がいなくてこっちは楽しめないってのによお」

「なんでも孤児院には世話係の若い女がいるそうだ。羊の亜人らしいがな」

「羊？ 俺は別に羊でもいいぜ、ぶちこめればなあ。ははははは」

「お、またガキを捕まえてきたか」

仲間の一人が、幼い娘に後ろから剣を突き付け、檻へ歩かせていた。

少女は放心し、足取りはたじたとしい。

男は怒気を含んだ声で「早く歩け！」と少女の腕を剣でつついた。

少女の肌には紅い線が走る。

その時であった。

空を切ってジャンが現れ、真横から男を蹴り飛ばした。

男は重い鎖帷子と兜を纏っていたとは思えないほど吹っ飛び、家の壁に叩きつけられ崩れ落ちた。

重い金属音が辺りに響きわたる。

ジャンは必死に背中にしがみついていた真也を

「この娘を頼む」と降ろした。

真也はジャンの真剣な眼差しに気圧され、頷くのがやっとであった。

「き、き貴様はジャン・グリエール！」

男達の大將らしき、唯一馬に跨がっていた男が叫んだ。

「……お前には見覚えあるぞ。」

アマデウス帝国に尻尾を振ったアブアロン子爵の側近だな。

奴隷商人の真似事をする程、落ちぶれたか。

……覚悟は出来てるんだろうな？」

ジャンは再び羽ばたき、ゆっくりと浮かび上がった。

風が彼を基に円状に幾重にも拡がる。

「だ、黙れ黙れっ。」

敵は鎧も剣も帯びておらぬ。

皆で一斉にかかれっ！」

「うおおおおお」

側近の声を合図に部下達は剣を振り上げ、盾を構えながらジャンに突進した。

やがてジャンを捉え、先頭の男達が剣を降り降ろした刹那。

ジャンは消え、集団の横から急襲した。

ジャンが蹴った男は隣の男達を巻き込みながら吹っ飛ぶ。

一蹴りで半数近い男が動けなくなった。

ジャンはそのまま空を飛び残った男達に襲い掛かった。

男達は半狂乱になって剣を振るうが、全て虚しく空を斬った。

剣を避けるジャンは舞のように優雅であり、
旋回する度に一人、また一人と男達は減っていった。

眞也はジャンの流れるような美しい動きに目を奪われていた。

その時、恐怖の余り我を失った最後の男が眞也達を襲おうと剣を振り翳した。
かざ

咄嗟に少女を庇って抱き、しゃがみこむ眞也。

やられる、――そう悟ったが剣は落ちてはこなかった。

部下達が瞬く間に倒され、慌てて逃げようとする側近。

しかしジャンはそれを遮ぎり立ちほだかった。

驚いた馬は嘶き、
いなな

主人を振り落とした。

「もう一度聞くが、覚悟は出来たか？」

何も答えられず、震える側近をやがてジャンは蹴飛ばした。

あらかた終わり、ジャンは口笛を吹く仕草をした。

眞也は一瞬耳が痛くなったが、

それはすぐ止んだ。なんだったんだろ、と思う間もなく、眞也が庇っていた少女がジャンに向かって走り出した。

顔が涙で濡れている彼女は、勢いよくジャンに抱きついた。

「じゃーん、こわ、こわかったの」

ジャンはそっと少女を抱きしめる。

さきほどもでの険しい表情が消え、とても穏やかな表情だった。

彼の翼は少女の鳴咽を優しく包みこんでいた。

やがて孤児院の扉が開き、子供達は一斉にジャンの元へ駆け寄っていった。
二十人ほどを数える孤児達には、しっぽやつのを持つ子供もちろほらいる。

育て親と思しき、柔らかい綿のような毛が体を包んだ美しい女性が子供達の後ろから現れ、鉄格子の門を開け村人達を解放した。

そして真也も手伝い、歓喜する村人達と燃え残る火を消しとめた。

村に安堵が漸く訪れたのであった。

子供達はジャンの周りを取り巻き、

「マリーばっか、ずるーい」

と囃したてていた。羽に包まれ泣いていた少女は

「えへへ」

と涙は止まったが、

林檎のように紅い頬を未だ濡らしたまま、可愛いらしい笑みを浮かべていた。

その後、子供達から散々抱きつかれたジャンの下へ、三名の鳥族兵士が降り立った。

先程の口笛は彼等と呼んだのだろうか。

「ジャン様、遅くなり申し訳ありません」
壊された村の惨状に畏まる。

「気にするな。それよりその辺で寝てる男達をアブアロンに引き渡して、

慰謝料をたっぷり請求しておけ。

その金を村の復旧資金に充てるように」

「はっ」

「俺はこれから伯にお会いしなければならぬから行くが、お前等
は残って村人達を手伝え」

御意、と兵士は命に従った。

ジャンはなかなか離れたがらない子供達を

「また明日来るから」

とようやく引き離して、

二人は村を後にした。

ジャンの頭には子供達から貰った花の冠がある。

赤青黄、色とりどりの花が黒い頭の上で咲き誇る。

「ねえ、ジャン。その冠とっても似合っているよ」

「……うっせ」

今まで見たどんなアクセサリより綺麗だと、眞也は思った。

第二章 「Sky High」 (後書き)

この話ではいろいろと固有名詞を登場させました。

今後に必要なことから出したものもありますが

村名のように省きたかったが、かえってわかりづらいかなと思い出したものもあります。

でわ、ご覧頂きありがとうございます――（．．）――

第三章 「Intermezzo」

眞也が小高い丘の上にあるノクトレーン城に着いたのは、黄昏時であつた。

ハリウッド映画に出てくるような高い塔が何棟も聳え立つ要塞を想像し胸を踊らせていた彼は、目の前のそれに拍子抜けした。

水の張っていない一重の堀。

苔や蔦で覆われ、辛うじて石造りとわかる城壁。

精々三階建て程度の、のっぺりとした建物は城というよりは砦という表現が相応しい。

跳ね橋には腕を軽く組んだフィオナが立っていた。

亜麻色の髪、

オレンジのワンピース、いや、彼女の存在全てを夕日が祝福しているような錯覚すら起こる。

しかし、

城壁に浮かぶ彼女の影は、荒ぶる尻尾をより大胆に表現していた。

だからであろうか、二つの影はそれを隠そうと延びていった。

「どこをお散歩していたのかな？」

優しい口調、でも笑ってない。

「ま、待ったあ？」

「うんっ、とっても」

そう言い、彼女はジャンの嘴を掴んだ。

（やば、嵐がくる。ジャンも言い訳すればいいのに。いや、どっちみちもう喋れないか）

そう思った真也はフィオナに、村が襲われてたこと、敵を撃退したことを話した。

怒りのぶつけ先を失ったフィオナはまだ何か言いたそうであったが、嘴を掴んでいた右手で亜麻色の髪を軽にかきあげた。

自分を落ち着かせるような、というよりは場を落ち着かせるような仕草だった。

「とりあえず、伯はさっき外出して、戻るの時間かかりそうだから、先にご飯でも食べよっか」

と真也達の同意を見ずに城の中に入っていく。

彼等は急いで彼女の後を追った。

とはいえ、夕食までもまだ少々時間があつたので、

真也は二人に軽く城を案内してもらった。

「真也さ、泊まるとこないんでしょ？　伯が『自由に使っている』って」

と案内された個室。

ベッドと燭台だけの殺風景な狭い部屋であつたが、

寝泊まりすることなどまったく考えて無かつた真也には有難い申し出だった。

やがて大きな鐘の音が鳴り、三人は食堂へ向かった。

伯の部下は一同に介して食事を取る決まりらしく、中は雑騒で賑わっていた。

眞也達が座ったテーブルの右隣にはつぶらな瞳をしたミノタウルスが二人、左隣には猫族の亜人二人と人間一人と、様々な種族が見てとれる。

中には貴方何系ですか？ご趣味は何ですか？と聞きたくなるような何かもいた。

眞也は食にありつけた喜びも取り敢えず措き、お預けされていた質問を次々に投げ掛けた。

何故かフィオナの口振りが重かったので、ほとんどジャンが答えてくれることとなった。

旧レインホールド王国の『旧』の意味は、

王国は一年ほど前に王都をアマデウス帝国軍に占領され滅亡した、ということであった。

前々から争ってきた帝国軍の侵略をよく防いでいたが、

国王の急逝後、唯一の血族の王女の下で、亡国の途を辿った。

国王の死後、臣下諸侯は日和見的に傍観するものが増えたが、中には積極的に帝国側に参戦するものも現れ、戦力の被我的差は余りに大きかったそうだ。

ちなみに国王の死の直前に王女の姉君も亡くなっており、二人とも急逝したので、謀殺されたとの噂が絶えないらしい。

「今日、村を襲った奴等いたじゃん。

彼奴等^{あいつ}は真^まっ先に帝国に寝返りやがった」

「ということは、伯は王国側ってこと？」

「もちろんそうだ。」

伯も俺達と同じ亜人で元々貴族じゃなかったんだ。

俺達が帝国軍の奴等を何度も追い返して、その功績で伯が爵位を得たんだ。

何気に亜人が爵位を貰うのって初めてで、お陰で俺達は堂々としてられたんだぜ。

つー訳で、恩があったから、王国に味方し続けたんだ。」

「じゃあ、王国なくなつて今ヤバくない？」

「そうだな……。俺達も帝国に囚われた王女を救つて、王国を復興させようって頑張つてはいるんだけどな……」

実際、伯と同じく帝国に従わない諸侯は力強く、時には懐柔で減つてるようであり、

状況はあまり芳しくないようだ。

（伯爵って聞いたから、華やかで上品な人とか城とか想像してたけど、

どっちかと言うとレジスタンスみたいな雰囲気だな。

僕を助けてくれたのも少しでも人手が欲しかったということか？

食事とか寝床とか善意で用意してくれるってのも甘い話だよなあ、常識的に考えて。

でも涼兄ならともかく、僕が戦力になれるかどうか解らんけど）

眞也がそう考えてると、

ジャンが村に残した兵士の一人が報告の為帰還したので、

「わりい、俺ちと抜けるわ」

と彼は席を立ち、眞也の二つ右隣のテーブルへ移ってしまった。

後に残された眞也とフィオナ。

（このあと伯に会うんだし、話を聞かずにあれこれ考えてもしょうがないか）

と眞也は目の前のやたら固い黒パンを片付けることにした。

ジャンが話す間、殆ど料理に手をつけていなかったフィオナは、彼がいなくなると思い出したかのように眞也に話しかけ、料理を口にした。

「ジャンいいやつだね」

「でもアイツはロリ……子供好きだけど。」

でもアイツからかうと直ぐキレるから、気を付けたほうが良いわよ」（フィオナ、無理矢理ジャンの悪口言ってるような、なにより人のこと全然言えないんじゃない？）

「そうなんだ。ジャンめっちゃ強いし、気をつけるよ」

「うーん、まあアイツも一騎討ちとかはそこそこ強いかな」

「じゃあ集団戦とかが苦手ってこと？」

「んー、というより持久力があんまりないの。」

なのになぜか全力で飛ばすから、すぐ息切れするとうか……」

「今日十人くらいあつと言う間に倒してたんだけど……すぐつてどれくらい？」

「そうねえ、頑張って三分くらいかなあ」

「三分！」

（三分かぁ……おいしいというか、狙いすぎというか）

「うん、その後は抜け殻みたいになってるよ」

フィオナは抜け殻な彼を思い浮かべたようにで笑いだした。

隣のミノタウルの会話が聞こえてくる。

「お前んとこ、居候がまた増えたんだって？」

「そうそう、廊下で寝出す奴までいるんだぜ。参るって」

その後、食堂にモォ〜という可哀想な鳴き声が響き渡った。

第三章 「Intermezzo」 (後書き)

時間の概念は現代の地球の概念と同じだところ承下さいます。

第四章 「亜人の伯爵」 (前書き)

恒例の魔法説明タイム
とても書きづらいです。
色々微妙ですが……

第四章 「亜人の伯爵」

フィオナ達に案内され、通された一室。

三又の燭台が二脚だけ灯されており、

明かりは限りある者を巻き込み闇に浮かんでいた。

その一つには伯の姿があった。

左眼を覆う蛇柄の眼帯。

それは無数の刀痕、短く太い銀髪と共に、彼の精悍な容貌を際立てていた。

「我がイヴァン・ノクトレーンである。

お前が眞也、異なる地から来た者か。

確かに見馴れぬ姿だ」

低い、が同時にまだ若さも感じさせる声。

容貌と併せると、二十代半ばほどであろうか。

「助けて頂き、ありがとうございました」

「まあそんなに畏まらなくてよい。

お前も馴れぬ地で難儀であろう。

して、この後どうする心算つもりか？」

「実はまだ決まれません。どうしたら戻れるか解らないですし」

「ふむ……、当てができるまでは部屋を自由に使うがよい。

最近いざこざが多くてな、

何処まで出来るか解らぬが、可能な限りフィオナにも協力させよう」

「あ、ありがとうございます。

でも、何故、そうまでして頂けるのですか？」

「……何故、とは？」

「私も共に帝国軍と戦うのかと思っていました」
わたくし

「……どうしても戦いたければ止めぬがな、
我は無理強いする気は無いぞ。

それはお前が、お前の意志で決めることだ。

それに誰かを手助けするのに、いちいち理由など要らんだろう」
今日襲われた村が真也の脳裏に浮かんだ。

檻の外の子供達の屈託なく笑う顔。

檻の中の大人達の覇気なく愁う顔。

なぜ同じ人間の顔なのにこうまで違うのだろうか？

檻のせい？

本当にそれだけなのか……？

真也の思考を遮るように伯が言葉を続ける。

「今宵は疲れたであろう、ゆっくり休むがよい。

とその前に、一応属性を訊いておこうか？」

「属性？ 人とかですか？」

「はははは、そうかそうか、知らないのか。

やはり変わっておるな。

おいフィオナ、説明してやれ」

笑うと鋭い犬歯が垣間見えた。

後にジャンに聞いたところ、伯はウェアウルフ族最強と称される銀
狼であった。

フィオナの説明によると――、

この世界には、火・水・風・土の四つの属性があり、
命あるものは全て、つまり植物までもが何れかに属している。

下位の階級クラスの者は己の属性に殆ど影響を受けないが、上位の階級になると、属性を利用した技術——つまり、魔法が使える。

階級が高くなればなるほど、強力な魔法が使える、発動条件が緩和される。

「例えば、私は火の属性で、最高階級の支配者ドミネーターなの。あ、これ別に自慢じゃないわよ」

右手を真也の方に差し出し、掌てのひらを広げると突如、人魂のような火玉が宙に現れた。

蝋燭のような只在るだけの受動的な飼われた炎ではなく、其処で苛烈な生を彩る攻撃的な焰に見えた。

「これは火魔法の基本中の基本、一番簡単なやつ。でも下位者は発動するのにすっごく時間掛かったり、そもそも出来なかったりするの。」

あと雨が降ったら使えないとか、火が無いと発動できないとか、下位者には人々それぞれ制約があるわ」

「ひ、火が無いって？」

焼ける空気の痛みに顔をしかめながら話す真也に気付き、彼女ははっとして火玉を掴み、滅した。

「えっと、属性エレメントは属者に力を与えるの。」

例えば水属性者は海とか、陸地でも雨が降ってる時とかは、身体能力を含めた全ての技能が上がるの。

当然、魔法も発動し易くなったり威力も上がるわ。

何故なら海水とか雨には水のエレメントが多いからね。

火属性だと、そうねー。

建物にやたら火を点けたがる盗賊とかは、だいたい火属性だと思う

わ。

こんな感じだけどどうかな？

ここまで解った？」

眞也はぎこちなく頷いた。

フィオナの言葉の意味はなんとなくは解る。

しかし、

日常に全くない概念、——特に受け入れたら元の世界の秩序を否定してしまうようなそれを受け入れることは、

今までの自己の否定に間接的に繋がるので、本能的に躊躇ためらわれたのであった。

その意味では、まだ亜人のほうが受け入れ易かったであろう。

進化の過程で自分の世界とは異なる生存競争があったのだと納得させられなくは無かった。

だから眞也は彼女の魔法を見た今でさえ、

きつとなにかトリックが有るのだろうという淡い期待を棄てきれなかったのだった。

「ほんととは階級クラスとか魔法原理とか他にも話すことはあるんだけど、ふふ、今は止めときましようか。

でね、

苦手な地形とか攻撃を隠す為に属性を明かさない人も居るんだけど、眞也の場合、そもそも自分の属性を知らないんだから今から調べてみよっか」

彼女は部屋の隅に置かれていた、飛龍の紋様が施された箱を取り出し、静かに蓋を開けた。

中には丸い水晶が据付けのように青紫の布に埋まっており、彼女は箱ごと眞也に差しだした。

間近でよく見ると、水晶には赤・青・緑・茶、と四色の微小な粒が不規則に廻めぐっていた。

「『精水晶』と言ってな、
触れる者に感応して属性を示すものだ。
手に取ってみるがよい」

不思議な水晶に魅入っていた眞也は伯に促され、おずおずと水晶に手を伸ばした。

すると、触れた先から四色の粒は白色に変わり、粉雪が硝子に積もって行くかの様に水晶全体に緩やかに広がっていった。

「し、白だと？ なぜ四色のどれにもならない!？」
「そんなっ！エレメントが皆、反応するなんて!」

フィオナ達が驚きの声を叫んだ時には、
水晶は純白に染まりきり、控えめであるが自ずから輝き始めていた。
彼等の驚愕は、あるいは眞也が今日一日で味わったそれに肉薄するものであったかも知れない。

やがて、

「これは——光の属性」

伯爵は静かに呟いた。

「光の属性とはどのようなもので？」

どうやらフィオナも初めて耳にする属性のようであった。

「光とは、清浄の憐光。治癒を司るものだ。

その属者は限りなく少なく、魔法の存在自体を知る者すら、もはやほんの一握りに過ぎぬ。

今となつては『伝説』という言葉すら相応しくなくなったほどだ。」

「し、しかしっ、俺だって回復魔法は使えますが」

淡々と話すノクトレーン伯とは対照的に、ジャンは声を荒げる。

「お前の回復魔法はあくまで体を活性化させて、回復速度を高めているだけに過ぎぬ。

それはお前の風属性に限らず、四属性全てそうだ。

しかし、光魔法は瞬時に対象者を元在った姿に復することが出来るのだ。

口を裂かれようが、

鼻を削がれようが、

目を抉られようが、

関係なく」

そう言うとき伯は右眼を瞑り、息を吐き、再び言葉を紡ぎ始めた。

「伝説の魔法と呼ばれていた所以は二つある。^{ゆえん}

まずは、四属性には無い禁忌魔法が二つ有るということだ。

その魔法とは、『死者蘇生』、そして『浄化の光』。両者とも、発動と引換えに法者に多大な代償を求める。それが禁忌とされた理由だ。

残念なことに我には魔法の効果は解らぬが」

（『死者蘇生』の効果って死者の蘇生以外に何があるの？）
眞也は思ったが、
勿論言葉にはしなかった。

「もう一つは、先にも言ったが、属性者が極めて少ないということだ。

仮に居たとしても、法者は隠し通して来たのであろう。

もし、知られると、魔法を利用する者、逆に恐れる者によって法者に危害が及ぶのが目に見えていたからだ」

「で、あるならば伯はどうしてご存知で？」

伯はフィオナの問いに答えず、彼の左眼に当てられていた眼帯をゆっくりと外した。

そこには、右眼と同じく鋭い瞳が瞬いていた。

フィオナとジャンは息を呑む。

三年前、伯が失った左眼が確かに其処に在った。

「この眼は光魔法によって治癒されたものだ。

隠していたのは、我が失明したことを知る者が多過ぎてな。

光魔法の存在を誰にも悟られなくなかったからだ」

伯は蛇柄の眼帯を再び填める。

「我は一人だけ、光属性者を知っている。

……いや、知っていたと言う方が正しいか。

その方の御名前は、

シャルル・レインホールド。

フィオナもよく知っているだろう？

今は亡き王女。

そして帝国に囚われの身になられたニーナ王女の姉君だ」

「ま、まさか……、そんなことって……」

フィオナは両手で顔を覆い、崩れるようにからだ軀を折った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2979n/>

たった一つの異譚 ～Crossing～

2010年10月9日12時40分発行